

特攻隊史研究の一視点

山口 宗之*

A Perspective on the History of the Kamikaze Pilots

Muneyuki YAMAGUCHI

Abstract

About 4160 Kamikaze pilots(died) in the Daitowa War (大東亜戦争). They were investigated and the followings were found. ① There were very few privates in the army. ② The majority of the pilots from the Navy were noncommissioned officers and privates. ③ In case of the navy officers, almost all of these were reserve officers. These were important facts in the history of Japanese armed forces.

は し が き

特攻隊について『広辞苑』には「特別攻撃隊の略称。特に太平洋戦争中、体当りの自殺的な攻撃を行った日本陸海軍の部隊」とあり、「神風特攻隊¹⁾」を例示している。また『大辞林』では「第2次大戦中、爆弾を積んだ飛行機などで敵艦に体当たり攻撃を行うために編成した部隊につけた名」となっている。これらの記述により特攻隊員が爆弾もろとも破砕死したことは察知できるものの、特攻隊史を知るべくあまりにも不完全な表現といわねばならない。すなわち必ず死ぬことを運命づけられた特攻隊員はいかにして選抜されたか(志願か命令か?), もっとも有名な飛行機による体当たり以外にどのような方式があったか、今日の自衛隊のごとく陸・海・空が一本化されず別組織になっていた陸軍・海軍の各特攻隊の間で何らかの差異はなかったか、隊員はどのような思想をもって必死の攻撃に赴いたのか、等いくつかの疑問点が胚胎するであろう。

残念なことに防衛研究所戦史部には特攻隊に関するまとまった資料はないといわれる。しかし個々の戦記・回想録の類は多く刊行されており、そのすべてが学術的レベルとはいえないにせよ、研究上の手掛りとなるのは決して少なくない。またジャーナリズム側で企画された総合的記録集として『別冊1億人の昭和史・特別攻撃隊』(昭和54年毎日新聞社),『写真集・特別攻撃隊』(昭和55

年国書刊行会), および個人の著作としての『陸軍航空特別攻撃隊史』(生田惇, 昭和53年ビジネス社)などは十分研究に堪える水準である。なかんずく平成2年3月財団法人偕行社内特攻隊慰霊顕彰会の手になる『特別攻撃隊』(B5判388頁, 非売品)は「各種特攻隊の直接関係者が、彼我の戦史を参照し, 自分の体験に基づいて」「事実のみを最も簡潔に記述」する方針のもと4160名からなる特攻戦死者の名簿をまとめ「大部分は公的記録に基づきつつ, 「その後の調査によって発見された誤りを修正」し, 「現時点で最も信頼するに足る名簿」(以上, 同書「はじめに」)と自負する好箇の資料集である。筆者は主としてこの書に拠りつつ前記の問題点に答えてみたい。

なお特攻隊というとき関心をもつもの多くがまず思い浮かべるのは開戦劈頭特殊潜航艇によるいわゆる「真珠湾9軍神」であろう。しかしこれには救出方法が用意されていたことを考えると, いわゆる「十死の死」を否応なく負わされて出撃した昭和19年10月以後の特攻隊とは性格を異にするものといわねばならない²⁾。ここにいう特攻隊はサイパン島失陥などで戦局急迫をつげた昭和19年9月以後急速に準備がすすめられ, 同年9月13日レイテ東方洋上に「隼」(一式戦)で突入した陸軍大尉小佐井武士・軍曹山下光義を皮切り³⁾として本番を迎え翌年8月戦争終結に至った。その方式としては飛行機およびロケット噴進による有翼爆弾「桜花」を用いた航空特攻, 木造合板製高速ボート「震洋」⁴⁾「四式肉迫攻撃艇」による

*教養部

平成6年9月21日受理

水上特攻, “人間魚雷回天”による水中特攻, 敵中に強行降下して施設破壊に当たった空挺特攻, 飛来する敵大型爆撃機B29に対し体当たり撃墜を使命とした“震天特攻”など多くの方式によって強行されていった。前記の4160名はそれらを網羅するところの今日の時点で把握し得た特攻戦死者の総数である。以下考察を試みる数字その他は特攻の方式別を一括したものであることをお断りしておきたい。また氏名はしるされているものの, その階級, 経歴・生年(年齢)等未詳のものがかなり含まれている。したがってそれが明確である例のみをとりあげて行ったものであることも特記したい。

1. 数量的整理

まず4160名中階級・年齢・突入年月日等の判明する陸軍1327名, 海軍2616名を階級別に整理するとつぎのごとくである。

	陸 軍			海 軍		
	階 級	人数	100分率	階 級	人数	100分率
将 校	少 佐	4		少 佐	1	
	大 尉	27		大 尉	49	
	中 尉	57		中 尉	313	
	少 尉	504		少 尉	453	
	見習士官	5		少尉候補生	29	
	(小 計)	597	(45%)	(小 計)	845	(32%)
准士官	准 尉	21		兵 曹 長	50	
下士官	曹 長	106		上 等 兵 曹	445	
	軍 曹	204		1 等 兵 曹	510	
	伍 長	397		2 等 兵 曹	612	
兵	兵 長	2		水 兵 長	153	
	上 等 兵	0		上 等 水 兵	1	
	(小 計)	730	(55%)	(小 計)	1771	(68%)
	計	1327		計	2616	

* 見習士官(少尉候補生)以下では陸海軍間に名称の違いがあるが, 同一線上は同じ階級である。

まず見習士官⁴⁾(少尉候補生)以上を幹部軍人とし, 准尉(兵曹長)以下を下級者として大きく2分すると陸軍ではそれほど差がないのに対し, 海軍ではおおむね3対7の割合となり下級者の比率が高いのが目につく。つぎに階級別でみると上級幹部に属する少佐が陸軍に多く, 逆に中尉では海軍が断然多い。また陸軍少尉の504人は絶対数において海軍2等兵曹の612に劣るが, 階級毎の百分率では38%を占め, 陸海軍を通じもっとも高い。見習士官(少尉候補生)および准尉(兵曹長)が少ないのは陸海共通するが, 陸軍ではことにわずかである。下士

官以下では陸海間にそれほどの違いはないが, 下級下士官(伍長・2等兵曹)がともにもっとも多い。最下級者たる兵の部で海軍では全構成の一部をなし154名, 6%を占めているが, 陸軍では全1327名中わずか2名のみであり, ほとんど要員とされていなかったことが特徴的である。これを要するに陸軍の方が幹部の率先垂範の色合いがやや強く, 最下級者をくり出すに至っていないことが, かなり大づかみながらいえるのではなかろうか。

しかし陸海に共通するのは将校にあっては少尉, 下士官においては伍長(2等兵曹)の絶対数が多いことである。少尉は操縦将校としての教育を受けた軍人の初任階級, 伍長は操縦下士官教育修了者の初任の階級⁵⁾であり, 当然年若く伎倆的に未熟であったと思われるが, そのようなレベルの者がもっと多く出撃したのである。このことは技術的にもっとも熟達していたと思われる准尉(兵曹長)の出撃数が極度に少ないことと考え合わせ, 特攻作戦の非情さはともかくとして成功度の低かつたろうことを裏書きするというべきである。

次に特攻戦死者の年齢分布を考察する。『特別攻撃隊』所収一覧表では生年が記載されているが, 大正15(1926)年生=19歳というかたちで換算する。またその戦死の日付は昭和19年10月から20年8月まで10か月に及び若干のずれを免かれないが, 機械的に統一した。

陸海共通するのは19歳~24歳に集中し, 陸軍75%, 海軍85%を占めていることである。陸軍22歳, 24歳, 23歳, 20歳, 21歳, 19歳の順, 海軍19歳, 22歳, 20歳, 23歳, 21歳, 24歳の順となっていて海軍の方が若い年齢の占める割合は高い。また陸軍では18歳以下が2%足らずであるのに対し, 海軍では19歳が絶対数でも第1位であるのに加えて18歳以下が178名8%弱, 昭和4年生16歳が1名含まれていることが目につく。このことは総数において海軍が4対6の割合で多いことも関係があるが, 陸軍が操縦将校初任の少尉が主力であったのに反し, 海軍では昭和18年以後大量募集した予科練習生出身の初任下士官(2等兵曹)が中心となっていたことに対応する現象といつてよいであろう。要するに大正10~15年生の健康な男子が特攻隊の主力を形成していたのである。

陸 軍				海 軍			
生年	年齢	人数	百分率	生年	年齢	人数	百分率
明治43	35	0	0	明治43	35	1	0.04
44	34	0	0	44	34	0	0
大正 ⁴⁵ ₁	33	4	0.3	大正 ⁴⁵ ₁	33	3	0.1
2	32	15	1	2	32	3	0.1
3	31	14	0.9	3	31	2	0.1
4	30	20	1.3	4	30	6	0.3
5	29	14	0.9	5	29	0	0
6	28	25	1.6	6	28	8	0.3
7	27	57	3.6	7	27	19	0.8
8	26	84	5.3	8	26	35	1.5
9	25	135	8.6	9	25	95	4.1
10	24	220	14	10	24	219	9.4
11	23	213	13.5	11	23	280	12
12	22	227	14.4	12	22	371	16
13	21	174	11	13	21	275	11.9
14	20	176	11.2	14	20	356	15.4
昭和 ¹⁵ ₁	19	165	10.5	昭和 ¹⁵ ₁	19	467	20
2	18	16	1	2	18	153	6.6
3	17	13	0.8	3	17	24	1
4	16	0		4	16	1	0.04
(計)		1572		(計)		2318	

* 百分率は陸・海それぞれの全人数に対するものである。
少数点以下2位で4捨5入。

2. 将校における現役・予備役の対比

つぎに特攻隊の幹部軍人（将校）の出身・経歴の区分について考察する。周知のごとく兵役の義務が課せられていた時代、20歳以上の男子は徴兵検査後一定期間軍務に服することになっていた。しかしそれとは別に未成年のころから軍人を志して陸軍士官学校・海軍兵学校に入学し、定められた修学年限を経たのち20～21歳ごろそれぞれ陸軍少尉・海軍少尉に任じられ停年まで軍隊内で勤務する者がいた。これが現役将校であり、いわば専門職としての軍人である。

これに対し中等学校（現、高校）卒業以上の学歴を有し学校教練合格証書⁹⁾を持つ者が徴兵検査に合格し最下級兵（2等兵）として軍隊に入り約3か月後登用試験（幹部候補生〈甲種、乙種は下士官要員〉）を受け、一定期間の訓練を受けて予備役陸軍少尉に任じられて離隊、戦時中必要に応じて召集を受け軍務に服する制度があった⁷⁾。またこれとは別途に昭和18年操縦将校の大量養成を目的として特別操縦見習士官制度が創設され、高等専門学校（現、4年制大学）在学以上の学生から選抜、ほぼ1年

間の訓練ののち予備役陸軍少尉に任じ、直ちに召集して軍務第一線につかした。いっぽう海軍には昭和9年創設の予備学生制度があり高等専門学校卒業以上の学歴をもつ者から召募、一定期間の訓練を課して予備少尉に任じた。昭和17年までは毎年60名以下の少人数であったが、昭和18年採用の13期は4700名余と爆発的に増大し、のちのべるごとく特攻隊の主要部分を占めることになった。これらは生涯軍人たることを志した現役とは違い、いわば戦時の人員不足を補うスペアであり、現役将校に比して人事管理その他格差がつけられていたと思われる。つぎに特攻戦死将校における現役・予備役数を対照してみよう。なお見習士官（少尉候補生）も将校に含ませること、陸軍には少尉候補者⁸⁾出身がごく少数含まれていることをお断りする。

陸 軍				海 軍			
階 級	人数	現役	百分率	階 級	人数	現役	百分率
少 佐	4	3	75	少 佐	1	1	100
大 尉	27	26	96	大 尉	49	45	92
中 尉	57	57	100	中 尉	313	96	31
少 尉	504	91	18	少 尉	453	6	1.3
見習士官	5	0	0	少尉候補生	29	0	0
計	597	177	29.6	計	845	148	17.5

* 百分率は各階級における現役の占有率である。

〔補註〕別に陸軍海上挺身隊（水上特攻）263名のうち将校47名が含まれているが、その内訳は現役12に対し予備役35、現役は26%を占めており陸軍将校全体の29.6%とほぼ照応する。

以上の対比一覧によって特徴的なことをあげればつぎのごとくである。少佐・大尉では陸海にそれほどの違いはないが、陸軍中尉が現役100%であること、海軍少尉の現役率が極端に低いこと、見習士官（少尉候補生）が陸海とも現役ゼロであること、等である。いっぽう予備役にあつては入隊直後からたとえば

一般部隊より30分早く、午前5時に起床ラッパで飛び起きると（中略）飛行服の着装を終えて格納庫前に駆けつけ、機体点検、演習整列の後、教官の演習課目の指示と注意、助教の注意があつて、5時45分には確実に一番機が滑走を開始する。（土田直鎮〈特別操縦見習士官3期、昭和19年5月入隊〉「海没」『学徒出陣の記録』昭和43年中央公論社）

というような実地實際を中心とする短期訓練であつたため戦列に加わるのが早かつた故と考えられる。

しかし何といつても不審に思われるのは陸軍少尉の現

役率18%に対し海軍少尉はわずか1.3%に過ぎないことである。全特攻隊中の主力の一翼を担った海軍少尉の99%は実に学生出身者によって占められていた事実を銘記せねばならない。

つぎに特攻作戦中もっとも集中的に行われた初期の比島、末期の沖縄に分けて検討する。まず比島作戦では

陸 軍			海 軍		
階 級	人数	現役	階 級	人数	現役
少 佐	1	1	少 佐	0	0
大 尉	8	8	大 尉	8	8
中 尉	20	20	中 尉	84	24
少 尉	97	35	少 尉	17	1
見 習 士 官	0	0	少尉候補生	0	0
計	126	64	計	109	33

となり陸海とも現役大尉以上の占率100%であるが、少尉にあっては陸軍27%に対し海軍5.6%となり少ない。つぎに沖縄（含九州南東方面）作戦ではつぎのごとくである。

陸 軍			海 軍		
階 級	人数	現役	階 級	人数	現役
少 佐	0	0	少 佐	1	1
大 尉	12	12	大 尉	32	28
中 尉	26	26	中 尉	195	45
少 尉	390	52	少 尉	403	1
見 習 士 官	5	0	少尉候補生	28	0
計	433	90	計	659	75

比島・沖縄に共通していえるのは陸軍にあっては中尉以上の指揮官クラスが現役100%を占めており、この点海軍大尉以上とほとんど同じ傾向をもつ。海軍中尉の現役率23%はともかくとして少尉において極端な違いが見える。比島作戦において陸軍では97人中現役35人、36%を占めているが、その中には若杉是俊少尉のごとく広島幼年学校2番、予科士官学校・航空士官学校ともに首席の俊才⁹⁾が指揮官ならぬ列機の1人として12月21日ミンドロ島にいち早く突入していることである¹⁰⁾。その他比島作戦では現役少尉が列機として出撃戦死した例が多い。沖縄作戦では現役率13%に落ちるが、それでも390人中52人は現役少尉が参加しているのである。これに対し比島では17人中1名いた現役海軍少尉は沖縄戦においては403人中わずか1人に過ぎなかったのである。そしてこの傾向は昭和19年11月から昭和20年8月に至るサイバ

ン・硫黄島方面を含む水中特攻“人間魚雷回天”戦死者においてもほぼ同じである。

階 級	人数	現役
海 軍 大 尉	9	9
海 軍 中 尉	34	23
海 軍 少 尉	33	4
海軍少尉候補生	1	0
計	77	36

すなわち大・中尉はほとんど現役であるが現役少尉は12%、現役少尉候補生は終始ゼロである。

比島から沖縄に至る特攻作戦に参加した現役少尉は陸軍士官学校57期、海軍兵学校73期がこれに当る。陸士57期2413名、海兵73期898名、それぞれその期の半数ほどが航空に進んだと思われる¹¹⁾。絶対数において操縦要員陸軍少尉がやや多かったと思われるが、それにしても現役海軍少尉の参加数・率がいちじるしく低いのは争われぬところである。大戦末期海軍当局が海軍兵学校出身の現役少尉を最後まで特攻出撃からはずした理由は何であったか、知る手だては今のところない。

〔補註1〕陸士57期中航空士官学校は1145名である（偕行社編『陸軍士官学校』昭和44年、秋元書房、265頁）。

〔補註2〕海兵73期は昭和19年3月22日898名卒業、うち500名が飛行学生として霞ヶ浦航空隊に入り、同年9月1日海軍少尉となった（影山昇『海軍兵学校の教育』昭和53年、第一法規出版、221頁）。

3. 特攻隊員の思想

前言したごとく「十死の死」といわれた特攻隊の選抜は命令でなく志願によってなされたといわれる。しかしそれは今日考えられるような白紙の状態での自由意志にもとづく選択とはいいい難かったようである。いくつかの例によって検討してみよう。

まず特別操縦見習士官を志願して少尉となり特攻隊長を命ぜられ昭和20年8月15日出撃することになったが、直前終戦の“玉音放送”により一命を拾った東山修二氏の回想録『生と死の谷間で——陸軍特別攻撃隊第303振武隊の記録』（昭和55年、私家版）がある。本書は「死に直面して苦悩を続けた特攻隊員の偽らざる気持を、ありのままに書き記したもの」（8頁）であるが、特攻志願のいきさつをつぎのごとくしている。

昭和20年1月29日著者の勤務する大刀洗陸軍飛行学校

長に対し陸軍中央部より同校の教官（将校）助教（下士官）で特攻3隊を編成するよう命令が下った。学校当局はさっそく全空中勤務者を講堂に集め、全員に白紙と封筒を渡して訓辞、特攻隊を志望する者は「特に熱望」と「志望」に分けて記入し、志願せぬ者は白紙のまま封筒に収め提出するよう命じた。著者はいろいろ思い惑ったあげく「熱望」と書いて提出したが、後刻同僚の話ぶりから察するに「熱望」組は少なく大部分は「志望」、なかには「白紙」も何人かいたらしい。数日後再び全員が講堂に集められ「心臓の鼓動が聞こえるよう」ななかで少尉（予備役）1、軍曹1、伍長1の3名がまず選ばれ、「正直のところホッとした。他の者にもサッと安堵の空気が流れたのがわかった」（28～29頁）とある。これによれば大刀洗陸軍飛行学校ではほとんど自由なかたちで志願者がつのられているのである。

ところがつぎのような志願の仕方もあった。昭和18年12月10日入隊の海軍飛行予備学生第14期生の編集にかかるとつぎのようであった。昭和20年1月徳島航空隊で訓練中のある夜、海軍兵学校出身のY分隊長が搭乗希望機種を提出を求めたという。彼は黒板に爆撃・偵察・攻撃・戦闘機といった機種を書きつらね、それぞれについていいねいに説明したあと最後に「特攻機」と書き、「特攻機に乗りたい者は志望するように」とつけ加えた。そして「何であれ、遠慮はいらない。自分で最も最適と思う機種を選べ。飛行に適性なしと悟った者は、地上勤務でもよろしい」といった。そこで水本氏らは艦攻・艦爆・水偵などそれぞれが希望する機種を書いて提出した。ところがその夜「特攻機を志望しない者が意外に多い（中略）精神がたるんどる。叩き直してやる」と怒号する分隊長によって全員がなぐられ、以後4晩にわたり別の上級者によって一同がなぐられることになった。いうまでもなく特攻機は機種でなく、あらゆる種類の飛行機が体当たりするため爆装したときそれが特攻機になる。異種の概念をあえて並列させた論理のあやまりを知って知らずか、このようなかたちで特攻志願を強制したのである。けっきょく水本氏は「私たちの前に残された道はただ一つ、特攻隊員になることだけであり、この道を拒否することは、不可能だった」（209～210頁）という諦念のもと特攻隊員を志願し、生き残った。

さらにまた神風特攻隊第1号といわれる海兵卒現役の関行男¹²⁾大尉が選抜されたいきさつはつぎのごとくであ

る。第1航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将は戦局を挽回するには特攻以外にないとの信念のもと指揮下の201航空隊にその編成を命じた。副長玉井浅一中佐は関が隊長に適任と考え深夜就寝中の関を呼んで「肩を抱くようにし」「この攻撃隊の指揮官として貴様に白羽の矢を立てたんだが、どうか？」と問う。いったん「一晚、考えさせて下さい」と答えた関は「薄暗い部屋のカンテラの下でじっと考え込み、翌朝になって引き受けます、と答えた」という。玉井の言葉は「強制的な『命令』という形はとらないまでも、督励する側に、決して拒むことはあるまいという上級者としての自信と、無形の圧力があつたことは事実」（森史朗『敷島隊の五人——海軍大尉関行男の生涯』昭和61年光人社、470～474頁）であつたろう。すなわち水本・関の例は自発的に申し出たといっても、それはほとんど命令に近いものであつた。特攻隊員4160名の志願の大部分はおそらく以上3例のようなかたちをとってなされたものと考えてよいであろう¹³⁾。

こうして選抜編成された特攻隊は最高司令部の作戦計画に繰り込まれ、出撃命令によって突入戦死したのである。

それでは「十死の死」に赴いた特攻隊員はどのような思想のもとみずからの死を決行したのであろうか。

まず東京帝国大学文学部国史学科に在学中、当然特攻戦死が予想される陸軍特別操縦見習士官を志願、合格した土田直鎮氏¹⁴⁾は

いづれ戦争に行くのは当然の義務と心得ていた（中略）所詮勉強は本式にはできないと思い、これを後廻しにして、先に死ぬ方を片附けることにした。

という心境で昭和19年5月熊谷陸軍飛行学校に入校し、はげしい訓練に終始した。やがて乗る飛行機がなくなって地上部隊に転属となり、台湾で終戦を迎えたが、

私としては少しも後悔の念は持っていない。（中略）とにかく国のために戦うことに情熱を注ぎ得た点は幸福であった。（以上、前掲「海没」）

という気持を淡々とししている。また九州帝国大学法文学部在学中の昭和19年12月1日現役2等兵として西部17部隊に入隊、昭和20年2月特別操縦見習士官に採用された田島東吾氏は志願の動機について

日本を愛し、愛国の至情止み難く勇躍死地に赴いた、何ていうことは建前であって本音ではあるまい。これが真実とは決していえないが、祖国のため、日本が勝つためにはどうしても已むを得ず死に行かねばならない、ということは誰しも考えていたことと思う。

『死と恐怖の日』昭和54年、私家版168頁）
 とししている。また旧制水戸高等学校文科在学中の昭和19年6月特別操縦見習士官を志願入隊した山極圭司氏¹⁵⁾は

自ら祖国の生命をかちえよ。戦の中にこそ生命がある。
 宿命の中に生きよう。現実をおのが身にはしとうけ
 とめよう（『青春の戦史戦後史』110頁、昭和51年、史
 記社）

と日記にのし、戦争下の若い男子として死にゆくことを宿命と受けとめてその中に生命を燃焼させることに意義を見出している。また昭和20年4月12日南西諸島方面で特攻戦死した予備学生出身の岡部平一少尉¹⁶⁾は2月22日付日記の一節に死の意義をつぎのごとくしている。

われらは喜んで国家の苦難の真ッ只中に飛び込むであ
 ろう。われらは常に偉大な祖国、美しい故郷、強い日
 本女性、美しい友情のみ存在する日本を、理想の中に
 堅持して敵艦に粉碎する。（前掲『あゝ同期の桜』128
 頁）

親・兄弟・女性たちのいる祖国を護り、アイデアとしての日本を敵の土足から防ぐため、みずからの肉体を捧げることに意義を見出した。

かくのごとく特攻隊員たちは死の意義を当時一般にいわれていた天皇のため、悠久の大義に生きるという概念的なものよりも、もっと身近な親・兄弟・女性・隣人そして美しい故郷、そしてそれらを包括する日本を護るため若い健康な男子として勇躍敵の侵入に身を挺することに求めていた、といってよいであろう。もちろんそこには迫りくる死に対する恐怖がなかったとはいえない。しかしそれを越えて死なねばならぬみずからの運命を敢然うけとめたと考えられる。

む す び

以上の考察によってつぎのことがいえよう。爆弾とともに体当たりする特攻攻撃は「十死の死」を不可避とする非情の作戦であり、無事生還を期待される決死隊とは性格を異にするものであった。4160名は志願により選抜されたというが、必ずしも完全な自由意志からでなく命令に近いものもあったと考えられる。そして中央当局の作戦計画に従って出撃が命令されたのであるが、指揮系統を別にした陸海軍間であって若干の差異があった。

まず見習士官（少尉候補生）以上の幹部軍人と准士官・下士官・兵ら下級者との数的対比である。絶対数において下級者が多いのは当然であろうが、陸軍45%対55%、

海軍30%対70%となり、海軍の下級者の割合が高かった。つぎに階級別百分率では陸軍少尉504名がもっとも多かった。下級者では陸海ともに下級下士官たる伍長（2等兵曹）が多く、最下級たる兵の部で陸軍はほとんど特攻要員としていないのに対し、海軍では構成要員にくり込んでいた。

つぎに年齢である。陸海共通して大正10年生（24歳）から大正15（昭和元）年生（19歳）に集中するが、海軍では19歳がもっとも多いことがあげられる。また18歳以下について陸軍ではほとんど含まれないのに対し、海軍では178名、全体の8%を占め、中には16歳の少年兵がいたことが注目される。

最後にいわゆる職業軍人すなわち現役と学生出身者予備役の対比である。中尉以上の指揮官級では陸海ともほとんど現役が占めたが、現役少尉にあつては陸軍では初期の比島で36%、末期の沖縄で13%を占めているのに対し、海軍では比島から沖縄まで現役海軍少尉は420人中わずか2人しかいなかったのである。いいかえれば海軍特攻の主力の一翼になった海軍少尉のほとんど100%は学生出身の予備役であった。それが当時の海軍当局のいかなる“配慮”によるものか不明であるが、特攻隊史上の重要な一事実として長く記憶されるべきであろう¹⁷⁾。

註

- 1) 昭和19年10月21日より11月19日に至る海軍航空特攻諸隊を包括した名称。第1～第5に増援隊からなり、それぞれ敷島・大和・朝日・山桜等の個別名をもっていた。総数419名である。当初海軍当局が大々的に報道したため、全特攻部隊に冠せられた名称と誤解される向きが多い。
- 2) 特殊潜航艇（“海龍”をふくむ）部隊においては特攻戦死者とその他の区別が困難とされ、『特攻隊史』では「特潜碑合祀者名簿」をそのまま登載するにとどめた。したがって本論ではその総数440名を対象から除外した。
- 3) 世上特攻隊といえは昭和19年10月25日比島タクロバンに突入した第1神風特攻隊敷島隊関行男海軍大尉以下5名が第1号とされる。しかし同じ第1神風特攻隊大和隊久納好孚中尉の突入は4日早い10月21日であり、さらに早くは9月13日レイテ東方洋上突入の飛行第31戦隊小佐井武士陸軍大尉・山下光義軍曹、10月19日カーニコバル諸島突入の阿部信弘中尉・寺内一夫曹長・中山紀正軍曹の例が記録されている（『特攻隊史』

- 130, 263, 295頁)。
- 4) 現役の場合陸軍士官学校・海軍兵学校を卒業して少尉に任官するまでの期間をいう。時代によって違いますがおよそ半年前後である。少尉の下、准尉の上にランクされるが、予備役の陸軍特別操縦見習士官、海軍予備学生は准尉の下に身分が置かれた。
- 5) 小学校高等科卒業年齢(14歳)以上を対象に募集した陸軍少年飛行兵・海軍飛行予科練習生は修了時兵長(水兵長)、実戦に参加するところ伍長(2等兵曹)となった。
- 6) 大正14(1925)年「陸軍現役将校学校配属令」によって中等学校以上大学(公立校。私立校は依願派遣)まで各校1名少尉以上の現役軍人が配置され「学校教練」科目を担当した。卒業時、卒業証書とともに「合格証書」が与えられ、徴兵入隊後、予備役幹部になるための必須の書類となった。
- 7) 志願を原則とした海軍にはこの制度はない。
- 8) 下級現役将校を補充する目的で軍曹以上、38歳未満の准士官・下士官から選抜、1年間陸軍士官学校に入学させて教育を施してのち現役少尉に任じた。大正9(1920)年創設され終戦時若干名が中佐・連隊長まで昇進した。海軍でも同様の制度があったが海軍兵学校出身の正規将校と区別して特務士官鎮守府在籍将校といい、責任ある部署につけなかった。
- 9) 14歳で広島陸軍幼年学校入学以来「(陸軍士官学校57期)同期生の華として注目され」た若杉について村上兵衛氏は著書に一節をもうけ、多くの逸話を紹介しつつ愛惜の言葉をつらねている。特攻戦死時21歳8か月(『桜と剣——わが3代のグルメット』昭和51年、光人社)。また水野帝氏にも同趣旨の文がある(「殉義隊若杉は俊日記抄」『偕行』昭和58年11月号)。
- 10) 殉義隊。隊長現役陸軍中尉敦賀真二(21歳)以下日野二郎・若杉は俊両少尉(ともに21歳、現役)、山崎武夫軍曹(25歳)、門倉好也伍長(22歳)の5名から成っていた。
- 11) 地上軍備を絶対視してきた陸軍の伝統がくずれ、昭和19年3月陸軍士官学校卒業の57期生から航空・地上の人員がほぼ同数となった(生田惇『陸軍航空特別攻撃隊史』17～18頁)。
- 12) 昭和19(1944)年10月29日新聞紙上その戦果が大々的に報ぜられたため関大尉らが第1号視されているが、先にのべたごとく9月13日すでに小佐井武士陸軍大尉らの突入が記録されている。また同じ神風特攻隊大和隊久納好孚中尉はただ1人10月21日セブに突入特攻戦死した。同じ海軍内において久納中尉が第1号とされなかったのは予備学生出身者であったため、海兵出身者たる関をぜひとも第1号に仕立てたかった海軍当局の作為によるものと解釈されている(大野芳『追跡ドキュメント消された戦史・神風特別攻撃隊「ゼロ号」の男』17, 27, 190～1頁その他、昭和55年、サンケイ出版)。
- 13) 大正10年岐阜県生、海軍機関学校を終えて現役大尉となっていた黒木博司は容れられねば自決せんと覚悟をもって血書をしたため特攻兵器回天の採用を当局に熱望した。容れられ徳山湾で率先訓練中、昭和19年9月7日回天の沈没により殉職している。ときに23歳。黒木の場合特攻そのものが目的であり、志願以上の意義があったと考えられる(吉岡勲『ああ黒木博司少佐』昭和54年、教育出版文化協会)。
- 14) 大正13(1924)年1月生、東京大学教授を経て国立歴史民俗資料館長在任中平成5年1月死去、69歳。
- 15) 大正14(1925)年生、東京大学文学部卒業。高校教諭を経て現在、白百合女子大学教授。
- 16) 大正12(1923)年2月福岡県生、台北帝国大学出身。特攻戦死時22歳。
- 17) かつて筆者は「陸軍と海軍」と題する小論を発表したことがある(日本歴史学会『日本歴史』485, 昭和63年10月)。問題意識は共通するが数量統計上多少の違いがあり、本論の方が正確に近い。また本論は階級・出身別・年齢・突入年月日等確認されるもののみを考察の対象とした。したがって特殊潜航艇(含・海龍)440名(前言)、「特攻戦没者とその他の戦没者を区分することが極めて困難であったので、比島及び沖縄の震洋関係戦没者全員の霊名をのせた」震洋特別攻撃隊1053名、陸軍海上挺進戦隊中、階級名を欠いている263名は除外した考察であることを重ねてお断わりしておく。(平成6・9・15)